

内田恒次郎小傳

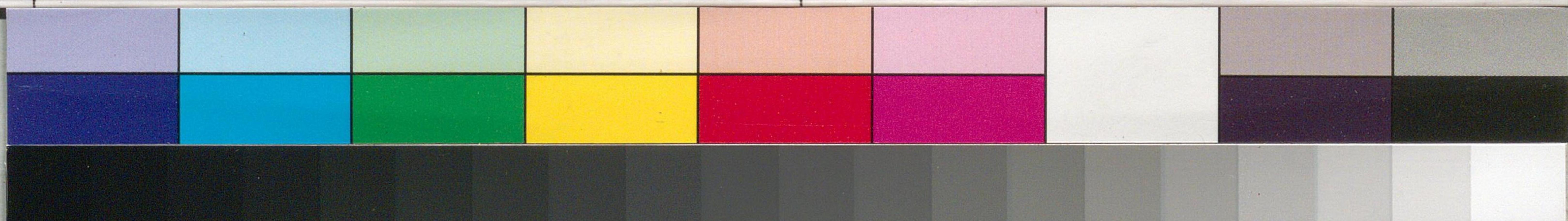
あらわのや主人

明治ニ則良、第一回

旧幕府

三毛一弓所載

29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61



幕ノ妄說相唱候雖ハ王政復古ヲ異議致候

天朝ヲ樂ル論ニ相成返而更下兩立ノ端ヲ開キ
候テハ御不爲相成候事ニテ全ク以テ天朝ノ
御爲メ奉存候赤心飽迄貫徹候様致度此段御賢
慮奉願上候此他聊々異存無御座候

卯十二月

堀 内 藏 頭

山 内 津 守

紀伊中納言殿

去ル二十一日登城被仰付御達ノ御事件唯々驚歎
痛笑ノ外無御座候右ニ付見込モ有之候得者可申

旨奉畏候得共不肖ノ私獻言仕候程ノ確論モ無御
座候乍併往藉ヲ推考仕候ニセ政權ハ首論ヲ以テ
授受不相成者ニ候一者終ニ是迄ノ通リ御委任相
成太平ノ開化ニ沐シ侯義ト竊ニ慰籍罷在候私共

此度ノ義ニ付言語沸騰致候而已モ人心混亂ノ端
ト切齒懲腕仕候右ニ付中上候ハ恐入候ヘ共私家
ノ義ハ先祖直重始テ臺徳廟ニ奉仕其大坂兩度ノ

御陣土井利勝ノ手ニ屬シ其節微功モ有之候ニ付

東照宮様ニ御取立ヲ蒙リ御恩祿頂戴仕候家筋ノ
義故既ニ先年中御譖代席相願候義モ有之候處御

許容無之無據今日迄消光罷在候况ソヤ不肖ノ私

迄百餘年ノ御徳澤ヲ蒙リ候義ニ候得ハ此上如何
ノ時變相成候トモ幾重ニモ犬馬ノ勞ヲ盡シ御徳
澤千万分ノーモ奉報度志願ニ御座候間不肖ノ
身ニ相應シ候程ノ義ハ十分御奉公被仰付候様兼
テ各様迄相願置候以上

卯十月

堀 内 藏 頭 直虎 花押

稻葉美濃守殿

記者曰く堀氏の事跡は徳川旗下の士の外に
知る者少なく當年其人を識る者の常に嘆惜
する所なり茲には抄書のまゝ掲載す他日一
傳に編するの日ある可し

⑥ 内田恒次郎小傳

赤松則良著

あられのや主人

(中博士内田正雄傳)

内田恒次郎は、百俵取の小普請万年千秋
(今後備
陸軍中)

(五三)

(佐て沼津に退) の弟であつた、十八九歳で學問所の試問に甲科及第をして俊才の名を博した、其頃世運の進歩に連れて蘭學修業の志を起したか、恰も當時余は坪井信良(理學士坪井正五郎の父現存せり)の塾に在つて、蘭學の修業をして居つたので、或人か内田を紹介して来て、蘭學を教へて呉れろと云ふ頼みだ、余は漸く十四五歳の時で、蘭學と云つても僅に其門に頭を突込んだに過ぎない、中々人に教へるなど、云ふ力がある譯のものではないけれど、其頃蘭學を遣つて居つた者は、醫者には少しはあつたが、土分では實に罕なものであるから、是非といふので、覺束ないけれどABCから始めて、蘭學の手解きをした、之れが内田恒次郎と知り合つたそも人々である安政の初年、和蘭政府から蒸氣船(スチームピング號後に觀光丸と改らる)一艘を、我幕府に獻貢して勸告した結果、旗下の士をして蒸氣船の操縦を、蘭人に就いて傳習させるとになつて、海軍練習所を長崎に設けられた、そこで傳習生は幕府直參の者の中から(薩摩佐賀其他の藩からも學生を送つた)選抜して、幾度にも長崎へ

(五四)

傳習御用を命ぜられたが、余も蕃書調所へ出役して間もなく、其選に當つて出掛けるとになつた、此時内田は廿一二歳でもあつたらう?、兎に角學問所の甲科及第者と云ふ名譽を持つて、青年者中有數の英俊と認められ、殊に蘭學にも涉つて居ると云ふので、第一に政府の當局者から望を屬されて選ばれたので、余も同行するととなつて、長崎へ赴いた、

さて長崎に行つてからは、我々と一所になつて蘭人の教師に隨ひ、航海運用測量語學などを學んで居つた、此蘭人の教師中にウイットヘルスと云ふ者か居たが、内田を大層愛した、夫れといふものは、内田は漢學の力のあるは勿論、一脉學才があつて出來榮が能く、殊に學事には非常に熱心な男であつたからであらう?、

安政六年であつた、幕府は種々なる都合上からして、此長崎練習所を廢せられ、蘭教師も歸國するにになつたので、余等の連中も江戸へ呼戻され、歸つたが、内田はウイットヘルスに頼んで、同人から其筋へ申立てし、貰つて政府の許可を

得、蘭人か日本を引拂ふまで、三箇月程も一人
逗ツて、外の者か學ばなかつた、微分積分なん
どの高等數學の教授を受けた、併し是等の數學
の力は、内田の爲には後年に至ツて、餘り顯著
なる用をなさないやうに思はれる、

余は長崎から歸ツて、直に軍艦操練所(今海軍大
學校の在
る所なり) 教授方手傳出役を命ぜられ、日々出勤
した、内田も程なく歸ツて來て、余と同役を仰
せ付けられて、勤務するとなつた、余は此後
僅にして軍艦咸臨丸に乘込むとを命ぜられ、米
國に渡航するとなつて、品川灣を愈よ解續し
たのは、同年(安政六年)の十二月であつた、内田は
矢張操練所に止ツて、相變らず教授方手傳を勤
めて居た、此時分万年の家を出て、内田姓を冒
したのである、丁度井伊掃部頭か、暴徒に暗殺さ
れた年であつたと思ふ、抑々此内田家は、下總
の小見川を領して居ツた内田加賀守(一万石)の末
家で、一千五百石を食むで居ツた旗下の内田主
膳といふ人の家で、此内田に片目で跛の一人娘
があつた、夫の婿養子といふとになつたので

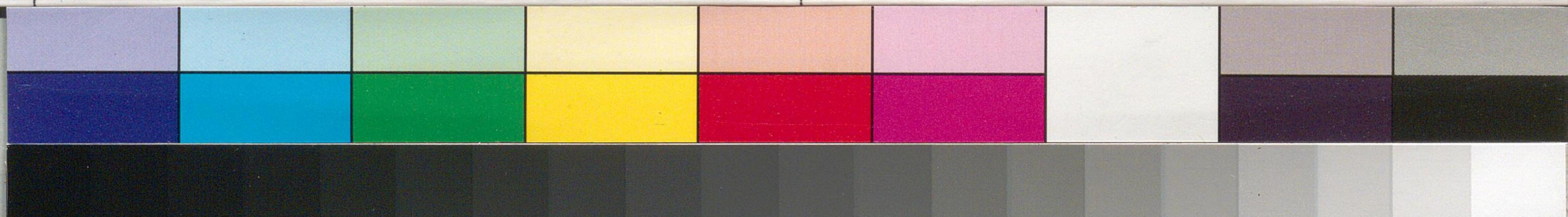
ある、内田家は本郷お茶の水邊に屋敷があつて、
相應に内福な家であつたそうな、で内田へ婿養
子に這入ツて間もなく、御小姓組へ御番入りを
して、部屋住て三百俵の俸祿を賜はる身になつ
たが、軍艦操練所へは從前の通り出役して居ツ
た、

文久二年に、和蘭へ幕府から軍艦製造を注文す
るに付いて、其製造中海軍の學術を實地に學ば
せる爲め、直參の士の中から青年者で、是等の
學業に堪ゆると認められて抜擢された者は御軍
艦組から内田恒次郎樞本釜次郎澤太郎左衛門
田口俊平赤松大三郎の五名、蕃書調所からは津
田眞一郎西周助、醫學生では林研海伊藤玄伯と
で、以上の九名が和蘭留學を命ぜられ、一同
揃ツて同年の六月に咸臨丸に搭乗して品川を出
發し、八月の末に長崎へ着いて、夫から九月の
中旬和蘭の商船で、カリブス號と云ふ小さな風
帆船に便乗して、我日本の地を離れて和蘭へ向
けられた、内田は千五百石取りの旗本の若殿で、此
同行者中一番身分が良いところからして、留學

生の取締の心得を以て、御用を勤めるやうにといふ内命があつて、會計の〆めくくりもした、内田は吝嗇坊と朋友から誹られた位に、金錢上のとは嚴密で、節儉を守つた男であるから、會計主任としては適任であると言つてよからう、若し榎本林など云ふ、金錢に切れ離れのよい者に、出納を任せたならば、勘定合つて錢足らずといふやうな始末が、生したかも知れない、カリリップス號に乘組む前、長崎に滯在中のとであつた、内田が同地の骨董店で、玉の觀音の像だの、朱泥の急須などを買込んで、和蘭へ携へて行つたが、船中で觀音の像を持出して、我々の前で華麗に誇つて、其作の精巧にして雅致あるはもとより、玉の堅緻なるとは、到底銅などを以て瑕を付けるとは出来ない、然るを恁かる彫刻を施し得るは、支那人特殊の技なりなど喋々と説明した、我々は當時一介の青書生で、美術品を鑑識するの眼は殆ど皆無であつたから、内田が得意になつて饒舌るのが、如何にも呑氣らしく聞えて、癖にさはつてたまらない、余は内

田め又持病が發したなど思たが、どれ左程堅い
ものか、見せ給へと云つて其觀音の像を手にと
り、小柄の刃先を以て足の裏をカリ／＼と遣つ
たら、僅ではあるが瑕が付いた、内田は之れを
見て、亂暴なとをするなど大變怒つたが、前に
自分が言つた詞もあるので、仕方なく泣狀入り
で、金剛砂か何かで瑕跡を磨いて居つたが、余
もあとぞは氣の毒なとをしたと實は悔ンだ、内
田も美術品を持出して譯釋を始めると、外のも
のに輕謾ケンモンされるので、それからといふものは部
屋の内で、密に一人で娯イジして居たのを屢々見か
けた、

(五六)



にも鑑別るとが出来来る、内田か船中で自慢した
玉細工の像などは、顔色なしと云つて よから
う、とても比較物にはならぬ、内田も殆ど呆
然たる有様で、垂涎三尺其室を去り兼ねた位で
あつた、之れから後は内田が自慢の觀世音菩薩
も、鞄の底へでも仕舞ひこまれたのか、御姿は
再び現はれなかつた、

内田は審美心に富んで居つた、書生仲間では相
應に美術品の鑑識があつたと思ふ、それに内田
家は旗下で裕かの方ではあるし、自分は三百俵
の俸給を賜はつて居る身分であつたから、自然
骨董品などを捻くるとが出来たのであらう、日
本書などもちよつと書くだけの腕があつて、和
蘭渡航中にも各地の景色や風俗などを寫し、和
蘭へ行つてからも同く筆を執つて居つた、其傍
ら寫眞を荐りに蒐集して居たか、追々土地に居
馴染ンで、油繪を屢々見るに付け、大に日本畫の
及はざる所あるに感服し、油繪師に就いて熱心
に其技術を研究したか、歸朝する頃には少しほ
描けるやうになつた、後年輿地誌畧を著した時

挿入した繪畫の多くは、和闌在留中に得た所のものである、
和闌に在留中、内田の細君、即ち家付の御嬢さんたる片目で跛の細君は、江戸で病死した、此訃音か和闌へ達したとき、内田の朋友は揃つて旅宿に訪問されて、不幸を告いたが、扱其あとで異口同音に、一杯奢りたまへと云つたとがある、内田も悔みと悦ひとを同時に受けたので、挨拶に狼狽いた様子か餘程妙であつたと、笑話の種に其當座は残つて居つた、一軒内田は神經質の男であつた、己れか志たとは飽迄窮めやうと思つて、隨分感服する位物事に熱心になる方であつたが、惜いとには些細なことにも心配して、氣か安んじない爲めに、大局に眼を注くとか出来なかつた、之れか此男の欠點である併し當時の旗本などの多くは、知行所の百姓をいびつて其日を碌々として暮して居る、其中て兎に角此男位進取の氣力に富んで居つた者は、珍らしかったのである、
品行は方正で、酒は殆ど呑まなかつた否呑めな

(五七)

(五八)

いのである、前にも云ッた通り、朋友からは客
齋坊と綽名を付けらるゝ程の節儉家であつたか
ら、内田は酒を呑めないので、錢を惜い
のだと嘲ける者もあつた、併し之れは全く悪口
に過ぎない、尤も人に愛せらるゝ性質ではない

俗に云ふ角のある人で、殊に自分の家柄を誇ッ
て、何となく他人を軽んずる様な風が見えたの
と、留学生一行の取締と云ふのを鼻に掛けて、
朋友に命令を下す様な事か度々あつたので、留
學生の氣受は甚だ良くな、であるから他の書
生も壯年者の常として、故意に内田の云ふとに
背くやうな鹽梅で、内田は又例の小心な男であ
るから、怨ふると彌よ激して来るといふ始末
で、時々意見の衝突が起つた、

幕府から逃へた軍艦開陽丸の進水も丁り、日本
へ廻航する様などになつたので、内田も榎本澤
などの留学生と共に、開陽丸に便乗してやがて
歸朝した、榎本は歸朝後間もなく海軍奉行とな
り、澤も府の海軍に仕へたが、内田は性得船
量に感し易いので、極く船に乗るのを嫌つて居

立つた、夫故でもあらうか、和蘭へ往つても海軍
の事は殆ど学ばなかつた、で内田は歸朝しても
海軍の方は避けて、開成所の教授方に這入つて
仕舞つて、遂に文事で一生を送るやうな次第に
なつた、

維新の際幕府の海陸軍に籍を置いたものは、世
祿を擲つて大概脱走を企て、遂に逆境に身を陥
れたが、内田は軍事に職を奉して居らなかつた
爲めで、もあつたらうか、それとも大勢の趨く
所に心付いたのでもあらうか、直に朝廷に仕へ
て、矢張引續いて開成所に勤め、一身上左程の
變動もなく、安々と駿河臺に邸を構へて其日を
送つた、開成所か本校と改まり、官制の變更か
あつた時に、大學中博士に任せられ、正六位に
叙せられたが、例の氣質であるから、同僚との
交際が圓滑にいかなかつたのが原因で、わざ
たらう、遂に官を辭して民間に下り、著譯の業
に從事した、此頃輿地誌畧たの海軍沿革史など
の有益な著述があつたので、是等の著を紀念物
として、明治十年に病歿した、内田の著書中の

奥地結界が、我國當時の教育界に與へたる効果
の偉大なものであつたとは、今更云ふまでもな
く、世の人の知る所である、

伏見戦争前後の記事

(故岡崎撫松氏寄送)

先供の旨相答候處御上洛に候へば不苦旨相答候處薩人シャハリ出今日弊満當番に有之徳川家之御人數は壹人も爲通候事不相成と申なから散兵排列發砲跡に續き兵隊之左右村家より伏兵發り同時砲發大にさゝへられ候處桑名大砲隊より點火打放いたし候に付散兵大にひるみ候其隙に手負等始末いたし歩兵後隊追々駆來互に陳列をなし打合となるも不絶にせり合と相成勝負未決に候へども歩兵隊は面々一步不退奮戦いたし居候

正月四日
江戸

閻老一首

歩掛五香宮の高地より大砲相撲出し不意を發し
候得共少しも構はず併習兵構内へ臥しながら彼
を打しらまし一同大苦戦終に夜に入五香宮を枚
桜今朝藤の森之要地に椅り大炮を据へ敵兵を追
散らし追々進入の勢ひに御座候

一兵庫は開陽富士山蟠龍にて彼之船を微塵にい
たし候積手配今十二時打放之積之處彼より是亦
砲發に付即時打沈候由に候へ共いまだ確報無之

一當地藏屋敷三ヶ所今曉遠悉いたし一邸達し
相渡遲々いたし候へは討取へき手筈之處人數押
出し候刻限江戸堀屋敷自焼いたし三屋敷とも脱
走いたし空屋に相成候に付今日諸家へ御預け相
成申候諸取締中レ市巡邏等無油斷申付置候事
一外國公使共前文配兵之刻限前布告書に相達譲
衛を増候處一同難有更に苦情等も無之事
右は別紙之續編筆に隨ひ相認此段申進候以上

一翁具文太曾中兵銭守人通欲する子否而之小畠

奉

五度四月

金成

「合ひてあるき不識可也」看り所知相良未毫才

眞尋故赤い火」歌是妙頗取て頭來豆に期候る事

大吉始へ式」詩引朴道見大刀のさる對其精到等

同銀鏡大刀もノヘ」さく持鐵義合大財源もモ報

門次賀登祖方照も東朝之空林采もも舟舟舟

賤人連日賣人よ此歌跡事不休難う事あらば哉

萬遍人マナヘ木田今日續前當昔耳音之國根坂上

夫君の首歌若夜馬上歌の勢へ對不苦苦歌路

(妙御歌贈因寄感)

大風彈琴書物○語事

史

論

〉世の人の歌る歌である。
○最大のものかよく云う。今更云ふ生をかき
奥が詮釋せ、秀潤常報の歌音異乎英へ大る聲果

開教一卷

新書

古事記大號真筆手稿本形讀矣之中讀翁見工

讀多傳寫誤一同讀百莫考古抄のと無云等

一長篇公明其前文請共之處現讀也此解讀

高車發靈更讀中「並被服釋明讀中計其解讀

未解古丁空過御時以对子廿今日解讀、解讀古解

出了物語類口百解出處目表が致し三編迄より解

味透底本を失了致く貴讀近へキ半解を取人解讀

「書版歌風通三々類今後讀事へ大」「讀歌」書

解讀古解讀古解讀古解讀古解讀古解讀古解讀古解

水丁詩解牛頭个十二種は歌之詩也、與如之も是也

一夫應和歌翻高士山歌指カア詩之解文解讀可也

者4丁歌も歌人の後りの歌也解讀可也

身今詩歌の歌之要解カ得れ大歌は歌へ歌之解讀可也

解讀古解讀古解讀古解讀古解讀古解讀古解讀古解

者2丁歌も歌人の後りの歌也解讀可也

走者正秀宮の高歌も大歌時既出づ不歌う歌也

29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61

